

ローベルト・シューマン 《詩人の恋 Dichterliebe》 Op.48

第 2 回

藤本一子

《詩人の恋》の初版は 1844 年 8 月ライプツィヒ（ペータース）から第 1 集と第 2 集の分冊で出版されました（→初版表紙）。

分冊方式は、販売戦略のひとつでありましたが、各冊の構成内容は重要です。第 2 曲《僕の涙から》をご紹介する前に、分冊のラインナップをお示しておきます。

第 1 集 (Heft I)

1. 美しい五月に
2. 僕の涙から
3. ばら、ゆり、鳩、太陽が
4. 君の瞳に見入ると
5. 僕の魂をゆりの花冠に浸そう
6. ラインの神聖な流れに
7. 僕は恨まない
8. 知ってくれるなら、小さな花たちが

第 2 集 (Heft II)

9. あれはフルート、弦、トランペット
10. 歌がきこえる
11. 一人の若者が一人の娘を
12. 光輝く夏の日に
13. 僕は夢で泣いた
14. 夜ごとの夢で
15. 昔のメールヒェンから
16. 昔のいやな歌を



第 2 曲：僕の涙から Aus meinen Tränen sprießen

Aus meinen Tränen sprießen Viel blühende Blumen hervor, Und meine Seufzer werden Ein Nachtigallenchor. Und wenn du mich lieb hast, Kindchen, Schenk' ich dir die Blumen all', Und vor deinem Fenster soll klingen Das Lied der Nachtigall.	僕の涙から咲き出る たくさん、今が盛りの花々が そして僕のため息は ナイチンゲールの歌になる そして君が僕を好きなら、可愛い子 あげよう、その花々をぜんぶ君に そして君の窓辺で響くだろう ナイチンゲールの歌が
---	---

第 2 曲の詩の出典はハイネ『歌の本』「抒情挿曲」の第 2 番です。

先の第 1 曲の詩は過去形を基本としており、すなわち過去から記憶がたちのぼって、詩人の恋物語が始まりました。続く第 2 曲の詩は、しかし、現在形で書かれていることに注意したいと思います。この曲以降、詩人の恋は、昔の出来事であるにも拘らず、まるで、今ここで恋が進展しつつあるかのように現在形で語られていきます。

ところで、第 1 曲の詩は最終 2 行で、「僕は彼女に告白した、憧れと熱い思いを」と語りました。そしてそこにつけられたシューマンの音楽も憧れにみちていました。しかしそれは第 1 曲の分析譜で示されたように、トニカ和音で全終止せずドミナント和音で曲が閉じられ、終止感が得られないままに終わっていました。それは文でいえば、セミコロン[;]のようなも

のでしょう。これはハイネの詩にはなかったもので、シューマンが第1曲と第2曲を連続的に関係づけた独創的な構想です。第2曲は第1曲のセミコロン[;]をうけ、愛の告白の内容を明かすものです。

さて、第2曲で示される僕の「熱い思い」は、「涙」と「ため息」であり、それらは「花々」と「ナイチンゲールの歌」という比喩表現を通して愛する人に告げられます。しかも僕は、「君が好きになってくれるなら」という条件付きで、「花を贈り、ナイチンゲールを歌わせよう」といいます。実際に条件が満たされてこの捧げ物が実現したのでしょうか・・・それは不明です。僕の心と行動はためらいにみちているのです。

そのことを詩の構造でみてみます。詩は各4行2節構造。各行は3つの強音 *Hebung* をもち、一行おきに交差して脚韻を踏んでいます（交差韻）。

各行の韻律（リズム）は、基本的には、弱音と強音が交代しますが、すべてが規則的というわけではありません。弱音と強音が明快に交代する行と（第1節の第1、第3、第4行、第2節の第4行）、強音1に対して弱音2つがはめ込まれる行と（第1節の第2行、第2節の第1行、第3行）混在しています。さらに弱音2つのはめ込まれる場所も行によって異なることが、朗読してみるとわかります。たとえば、第2節第1行では、強音（*wenn*）のあと、弱音が2つ（*du mich*）置かれますが、第2節第3行では、冒頭に弱音が2つ（*Und vor*）置かれていると捉えることができます（ドイツ詩では自然な感じに韻律を読みかえることが許されていますから、読み手は強弱のリズムに合わせ、その範囲で不自然でないように読むことが可能です）。

注目したいのは第2節第2行です（*Schenk' ich dir die Blumen all'*）。この行だけ、冒頭に動詞が置かれています：「*Schenk'*あげよう」。熱い思いを抑えきれず、動詞を前方に押し出した心理状況が感じられます。しかしここを強音で読むと、そのあとのリズムが制御しにくくなりますから、ここはあえて「*schenk'*」を弱音に抑え、次の「*ich*」を強音で読むほうがよさそうです。そうすることで逆に、「*Schenk'*あげよう」をストレートに告げることができない「ためらい」が浮かびあがってきます。

民謡調で率直に始まった愛の告白が、しだいに揺れ動いて、第2節になると心のうちを伝えられないようすが、韻律構造で表現されているのです。短い詩ではありますが、ハイネの詩法の巧さが感じられます。

この詩に作曲したシューマンの音楽は、優しい情感にみたされ、ひそやかに、恋の思いを表現しています。第1曲の終わりは文でいえばセミコロンのようにだと前述しましたが、それをうけてこの第2曲がどのように開始するが重要です（→分析コメントを参照）。

音楽の全体は、詩の2行に対して4小節が与えられるシンプルな4部構成（A-A-B-A'）。セクションの最後は、ため息をつくような歌唱音型にフェルマータ記号が付され、そのときピアノパートが、異次元でナイチンゲールの声を響かせる仕組みは素晴らしい創意です。

歌の旋律は、基本的に詩の韻律に呼応してアウフタクトで開始したのち、語るように歌っていきますが、1か所だけ逸脱する個所があります。第2節第2行です（*Schenk' ich dir die Blumen all'*）[分析譜第3段第11-12小節]。ここでシューマンはハイネの微細なニュアンスに反応して動詞 *schenk'* を拍頭に置くとともに、4つの語「*Schenk'-ich-dir-die*」を16分音符4つで音高を動かさずにつぶやかせます。ピアノパートもこの個所だけ途絶えます。ハイネが韻律を通して心理を表現した個所に、シューマンも巧みな朗唱法で反応しているのです。最後の段は豊かな伴奏に支えられて憧れが膨らみますが、音楽は余韻をもって終わります。

《詩人の恋》第2曲 分析譜

今野哲也

第2曲 僕の涙から Aus meinen Tränen sprießen

A

Nicht schnell

Aus mei - nen Trä - nen sprie - ßen, viel blü - hen - de Blu - men her - vor,

(A) I ——— TU I U₇ I U₇ I

A

und mei - ne Seuf - zer wer - den, ein Nach - ti - gal - len - chor.

(A) I ——— TU I U₇ I U₇ I

B

9

Und wenn du mich lieb hast, Kind - chen, schenk' ich dir die Blu - men all'.

(A) U (B) U₇ U₇ U₇ I (E) I U₇ (F#) U₇ U₇ U₇ U₇

A'

13

und vor dei - nem Fen - ster soll klin - gen das Lied der Nach - ti - gall.

(B) U₇ (F#) U₇ (A) I U₇ U₇ U₇ I U₇ I

【分析者によるコメント】

(1) 曲の開始について

この曲の主調はイ長調 (A-dur) です。第 2 小節の変終止と、第 3 小節の全終止から調の判定は容易でしょう。

しかし冒頭ピアノパートが[a-cis]という「2 音の響き」で開始する点に注目したいと考えます。この 2 音は、イ長調の主和音の第 5 音省略形 ([a-cis(-e)]) と捉えることができます。ところが第 1 曲の最終音[嬰へ短調 (fis-moll) のドミナント和音]から続けて聴くならば、嬰へ短調の主和音に解決した形 (根音省略形[(fis-)a-cis]) と聴くことも可能でしょう。すなわちシューマンは和音としては不完全な「2 音」を響かせることで、第 2 曲が明るいイ長調なのか、あるいは第 1 曲の嬰へ短調を引き継いで曇ったままなのか、一瞬、聴き手を惑わせるよう設定しているのです。

(2) 楽曲の和声進行

第 2 曲は詩の 2 行づつ 4 小節にあてられた簡潔な 4 部分構成で、「A—A—B—A'」と分けられます。

- ① A では主調のイ長調が明確に保持されます。しかし B で属調のホ長調 (E-dur) に転じ、第 12 小節にかけてロ短調 (h-moll) から嬰へ短調へと調が揺れ動きます。A'は下屬調であるニ長調 (D-dur) のドミナント和音で開始したのちニ長調の主和音に全終止しますが (第 14 小節)、それが主調であるイ長調のサブドミナントの和音 (IV) へと転義され、その先は A の後半と同じになります。すなわちこの曲は主調 (A) から属調に進み (B: 第 9-10 小節)、さらにロ短調から嬰へ短調へと進み (B: 第 11-12 小節)、下屬調に“弛緩”して (A': 第 13~14 小節)、主調に回帰します (第 15 小節~)。属調から始まる一連の“緊張”状態を、下屬調によって“弛緩”させる和声構造をシューマンは短い楽曲で効果的に使っています。
- ② これを音楽表現としてみるなら、A では休止を交えながら終止形を反復することで主人公の「心のためらい」のようなものが表現され、B では対比的な短調のたたみかけを通して心情が前に出されます。つまり「熱い思いを抑えきれず、動詞を前方に押し出した心理状況」(藤本氏の詩に関する解説箇所) が音楽構造で表現されています。しかしこの熱い思いは、そのまま進展することなく、A'前半で下屬調によって緩やかにされ、心のゆれが表現されるのです。用いられている和声連結それ自体は慣習的な語法ですが、その組み立てにおいて、詩に反応するシューマンの巧妙な手法が伺われます。

(3) 「ゆれ」の技法

「ゆれ」の技法を多用するのはシューマン特有の手法ですが、ここでは、経過音や逸音 (転位音が解決するときの 3 度下行) が見出されるものの、さほど頻繁には用いられません。むしろ「ゆれ」を少なくすることで調を明快にし、一方で「ためらい」と「熱い思い」のせめぎ合いを和声で表現しています。これらによって主人公の率直な感情が強調されていると解釈されます。